

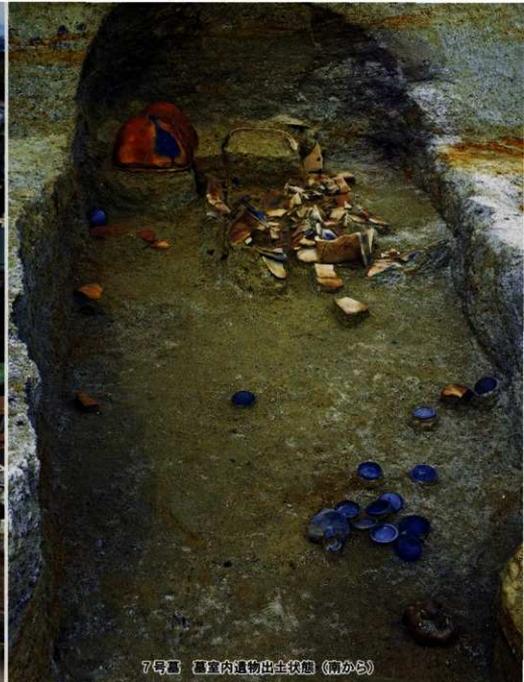
# 西大寺 赤田横穴墓群



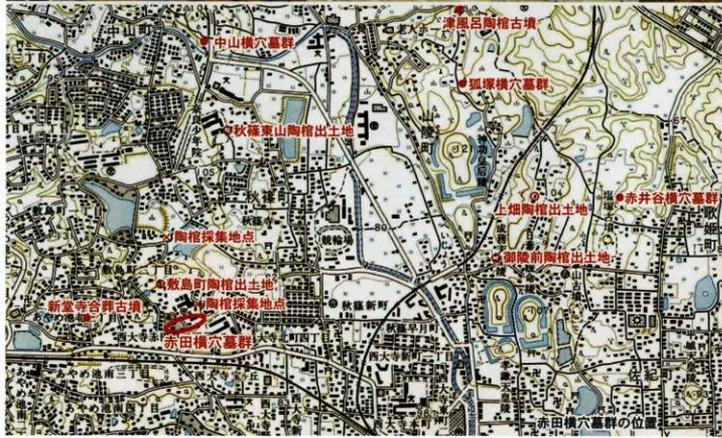
2011年 3月

奈良市教育委員会

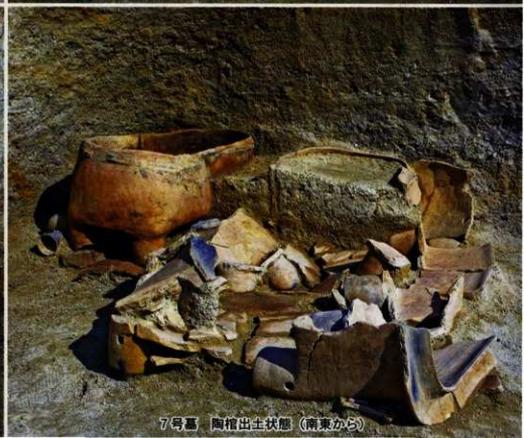
横穴墓の分布



7号墓 墓室内遺物出土状態 (南から)



4号墓 墓室入口の主室 (南から)



7号墓 陶棺出土状態 (南東から)

# さいだいじ 西大寺 あこだ おうけつ ぼぐん 赤田横穴墓群

## 1. はじめに

奈良盆地北端に位置する奈良山丘陵の両縁に沿って、左記層列古墳群をはじめとする多くの古墳が分布しています。そのほとんどが古墳時代前期後半から中期にかけて築造された古墳で、後期になるとその数が激減します。そうした中で、後期後半頃から新たに作り始められたのが丘陵斜面に横穴を掘削して埋葬する「横穴墓」です。奈良県内における横穴墓の確認例が少ない中で、奈良盆地北西部の丘陵には横穴墓が多く分布するという特徴が認められます。

西大寺赤田横穴墓群は、奈良市西大寺赤田町1丁目に所在する複数の横穴墓に対する総称です。医療法人平和会吉田病院敷地内の丘陵南斜面にあり、1983年（昭和58年）の工事中に偶然発見されて1・2号墓の発掘調査が行われました。1号墓からは土師質亀甲形陶棺と呼ばれる焼き物の棺と副葬された土器（須恵器や土師器）が出土しています。

今回、1・2号墓の西側で病院整備事業に伴う造成工事と病棟の増築が計画されたため、試掘調査を実施し、新たに12基の横穴墓の存在を確認できました。このうち、7基の横穴墓（3～9号墓）を発掘調査しました。

## 2. 横穴墓と出土遺物

横穴墓は、南に開口する墓室とその南側に延びる墓道で構成されています。

【3～5号墓】 墓室は長さ6～8m、幅2.5～3.5mで、土師質亀甲形陶棺が収められています。特に5号墓では陶棺2基が並び、北側の陶棺は10脚3列の脚部が取り付けられた長大なものです。床面を整地し、墓室入口に閉塞用の板をはめ込んだ痕跡がみられます。墓道は幅約1m、長さ6～8m分を確認しました。墓室内や墓道から6世紀後半～末頃の土器（須恵器・土師器）が出土しました。

【6号墓】 墓室は長さ3.5m、幅2.1mで、5号墓の一部を構築途中に壊してしまい、埋葬せずに廃棄されたとみられます。墓道は幅約1.5mで、約9m分を確認しました。

【7・8号墓】 墓室は長さ4～5m、幅2～2.5mで、土師質亀甲形陶棺が7号墓に2基、8号墓に1基収められていました。特に7号墓の小型陶棺（長さ1.1m）1基は埋葬当時のままの状態で見つかり、その下には円筒埴輪片を敷いていました。床面は整地されていますが、入口部分に閉塞用の板をはめ込んだ痕跡はありません。墓道はともに幅約1.5mで、約10m分を確認しました。墓室内や墓道から7世紀中頃の土器（須恵器・土師器）が出土しました。

【9号墓】 今回の調査区内では長さ約19m・幅約1mの墓道を確認しただけで、墓室はさらに北側へと続いています。7世紀の中頃の土器（須恵器・土師器）と陶棺片が出土しました。

## 3. まとめ

丘陵の横穴墓は不特発見によって偶然確認される場合が多く、このように多くの横穴墓を一度に発掘調査できる機会は多くありません。

西大寺赤田横穴墓群は、14基以上の横穴墓から構成されており、その中の9基について内容が判明しました。丘陵南斜面が病院の敷地外西方へと続いており、横穴墓群はさらに西側へと広がっていると考えられます。1～9号墓は、6世紀後半から7世紀中頃にかけて継続的に造られたと考えられます。横穴墓の配置を見ると、1～2号墓（東群）・3～5号墓（中央群）・6～9号墓（西群）の3群に大別できるようです。墓室の規模は、中央群が大きく東群・西群が小さくなっています。副葬品の土器型式から、中央群がつくられた後に東群・西群がつくられたことが推察できます。

横穴墓から見つかった土師質亀甲形陶棺は、突帯を縦横に貼り付ける特徴的な形態の棺で奈良盆地北半部から南山城地域にかけて多く出土しています。その造形が埴輪に似ているところから、その製作には埴輪生産に従事した古代の技術者集団である土師氏が関与していたと推測されています。調査地近隣の秋篠・菅原地域は土師氏の居住地であり、自らを葬る棺を自らの職掌を象徴するような伝統的デザインで製作したのかも知れません。